

四條金吾殿御返事

建治二年九月六日 五五歳

正法をひろむる事は必ず智人によるべし。故に釈尊は一切経をとかせ給ひて、小乗経をば阿難、大乘経をば文殊師利、法華経の肝要をば、一切の声聞・文殊等の一切の菩薩をきらひて上行菩薩をめして授けさせ給ひき。設ひ正法を持てる智者ありとも檀那なくんば争でか弘まるべき。然れば釈迦仏の檀那は梵王・帝釈の二人なり。これは二人ながら天の檀那なり。仏は六道の中には人天、人天の中には人に出でさせ給ふ。人には三千世界の中央五天竺、五天竺の中には摩竭提国に出でさせ給ひて候ひしに、彼の国の王を檀那とさだむべき処に、彼の国の阿闍世王は悪人なり。聖人は悪王に生まれあふ事第一の怨にて候ひしぞかし。阿闍世王は賢王なりし父をころす。又うちそふわぎはひと提婆達多を師とせり。達多は三逆罪をつくる上、仏の御身より血を出だしたりし者ぞかし。不孝の悪王と謗法の師とよりあひて候ひしかば、人間に二つのわぎはひにて候ひしなり。一年二年ならず、数十年が間、仏にあだをなしまいらせ、仏の御弟子を殺せし事数をしらず。かゝりしかば天いかりをなして天変しきりなり。地神いかりをなして地天申すに及ばず。月々に悪風、年々に飢饉疫癘来たりて、万民ほとんどつきなんとせし上、四方の国より阿闍世王を責む。既に危ふく成りて候ひし程に、阿闍世王或は夢のつげにより、或は耆婆がすゝめにより、或は心にあやしむ事ありて、提婆達多をばうち捨て仏の御前にまいりてやうやうにたいほう申せしかば、身の病忽ちにいゑ、他方のいくさも留まり、国土安穩になるのみならず、三月の七日に御崩御なるべかりしが命をのべて四十年なり。千人の阿羅漢をあつめて、一切経ことには法華経をかきをかせ給ひき。今我等がたのむところの法華経は阿闍世王のあたへさせ給ふ御恩なり。

是はさてをきぬ。仏の阿闍世王にかたらせ給ひし事を日蓮申すならば、日本国の人は今つくれる事どもと申さんずらん。なれども我が弟子檀那なればかたりたてまつる。仏言はく、我が滅後末法に入つて、又調達がやうなる、たうとく五法を行ずる者国土に充滿して、悪王をかたらひて、但一人あらん智者を或はのり、或はうち、或は流罪、或は死に及ぼさん時、昔にもすぐれてあらん天変・地天・大風・飢饉・疫癘、年々にありて、他国より責むべしと説かれて候。守護経と申す経の第十の巻の心なり。当時の世にすこしもたがはず。然るに日蓮は此の一分にあたり。日蓮をたすけんと志す人々少々ありといへども、或は心ざしうすし、或は心ざしはあつけれども身がうごせず、やうやうにをはするに、御辺は其の一分なり。心ざし人にすぐれてをはする上、わづかの身命をさうるも又御故なり。天もさだめてしろしめし、地もしらせ給ひぬらん。殿いかなる事にもあはせ給ふならば、ひとへに日蓮がいのちを天のたせ給ふなるべし。人の命は山海空市まぬかれがたき事と定めて候へども、又、定業亦能転の経文もあり。又天台の御釈にも定業をのぶる釈もあり。前に申せしやうに蒙古国のよするまでつゝしませ給

ふなるべし。主の御返事をば申させ給ふべし。身に病ありては叶ひがたき上、世間すでにかうと見え候。それがしが身は時によりて臆病はいかんが候はんずらん。只今の心はいかなる事も出来候はゞ、入道殿の御前にして命をすてんと存じ候。若しやの事候ならば、越後よりはせ上らんは、はるかなる上、不定なるべし。たとひ所領をめさるゝなりとも、今年はきみをはなれまいらせ候べからず。是より外はいかに仰せ蒙るとも、をそれまいらせ候べからず。是よりも大事なる事は日蓮の御房の御事と、過去に候父母の事なりと、のゝしらせ給へ。すてられまいらせ候とも命はまいらせ候べし。後世は日蓮の御房にまかせまいらせ候と、高声にうちなのり居させ給へ。

日 蓮 花 押

四 条 金 吾 殿